

ふるさと訪問ツアーに 参加して

深浦会東京 監査 角谷 勇二郎

深浦会東京設立10周年を記念して、故郷深浦で大人を対象に行われたこのツアーに幸いにも、19人のメンバーの一員に加わることができ、ふるさと深浦の秋を満喫してきました。10月17日夜、品川バスターミナルを出発し、翌朝五所川原駅に到着、深浦町出迎えの大型バスに乗り換え、一路深浦に向けて出発。車中では、企画課の山本さんより、深浦町の現在の様子などの詳しい説明を聞き、深浦町の現状について知ることができました。

昨年の観光客は、101万人との事です。ゆとり温泉で休憩(大きな浴槽が4つもある)の後、資料館見学、深浦の歴史を学び、(株)ふかうら開発の水産加工場を見学しました。つるつるわかめの製造については、次長の小野さんよりお話を伺い、知名度、売上も順調に伸びているとの事です。その後平沢町長との懇談会に出席、町づくりや、最大の関心事である3町村の合併問題について、ご説明をお聞きしました。住民の意見を最大限に尊重しながら、良き道に進むべく、努力していますとの事でした。宿泊場所となったウェスパ椿山では、スロープカーに乗り、展望台から白神山地や、海岸線の大展望を楽しみ、最新の溶解炉を使ったガラス工房なども見学しました。翌19日は、円覚寺見学の後チャン

祭りに出席し、深浦会東京設立10周年事業として募集しておりました町への寄附金『奨学支援資金』の贈呈式が行われました。祭りステージで久慈副会長から平沢町長に目録を贈呈したときには会場から大きな拍手があがっておりました。当日には深浦会青森の方々43名もチャンチャン祭りにいらしてあり懐かしい顔との思いがけぬ対面もありました。この祭りは、2日間で16000人のお客さんがこられるビッグイベントに成長しています。旧秋田屋旅館見学後は、長慶平でのキノコ狩り体験です。吾妻川に沿って道路があり、紅葉にはまだ早い時期でしたが、大自然に囲まれた風景は心を癒してくれるホスピタルでした。伊藤さんの農園で、なめこ1kgを収穫体験し、始めて長慶平を訪れましたが、深浦町から、約15分と近くいつかまた訪ねてみたいと思います。20日は、風合瀬イカ焼き村に寄り、お土産を購入後、鯉ヶ沢町のミニ白神に向かいました。ミニ白神散策では、地元のガイドさんのとても分かり易い案内で、大きなブナの木が林立する中を約1時間森林浴し、アップル街道を通り、青森空港より帰郷の途につきました。今回のふるさと訪問ツアーでは、バスを運転して頂いた角谷さん、企画課の皆様、お世話になりました。衷心より御礼申し上げます。



平沢町長との懇談会

「深浦会」10周年記念事業

故郷深浦への寄附〈ふるさと深浦への恩返し〉

119件、総額 金100万円

●ご寄付についての御礼●

深浦会東京 会長 黒滝 進



久慈副会長による寄附金の贈呈式

「深浦会東京」結成十周年の記念事業とされた「故郷深浦への寄附」は、ふるさと深浦への恩返しの一環として、またその用途を町の奨学資金の一部として活用頂くという趣意のもとに取り組みされました。

募集は平成14年7月から約三ヶ月に亘り、この間、「良く計画してくれた」「意義のあることだ」などと、温かいご支援とご協力のもとに進められました。そして、10月15日を以て締め切りの結果、119件の寄附が寄せられ、金額は全体で1,002,000円に達しました。

近年の長期に亘る経済の低迷、長引く不況という厳しい生活環境の中で、多額の貴重な浄財が寄せられたこととなります。

寄附金は10月19日、深浦のチャンチャン祭りの開会式場で、総額「金百万円」として、ふるさと訪問ツアーで出向いていた久慈副会長から、平沢町長に会場の大きな拍手を受けながら手渡されました。

町長からはその場で、「心のこもった貴重な寄附を、ふるさとの子の奨学資金として役立たせて頂きます」と、丁寧な挨拶がありました。

このことは東奥日報 陸奥新報のほか、「広報ふかうら」及び町の開設にかかる深浦会東京のホームページにも紹介され、町民のみならずにも広く知れわたることとなりました。

ところで、この会報には、お約束していた寄附者のお名前をすべて掲載させて頂きました。これら人数等を見ますと、当事業に対する共感の大きかったことを、改めて窺い知ることが出来ます。

ここに、この記念事業にご支援・ご協力を賜りました多くの方々に、重ねて衷心より感謝を申し上げ、ご報告傍々御礼と致します。

●ご寄附いただいた方々● (順不同、敬称略)

- 赤平次雄 吉井雄治 山下清次 兼平秀樹 野呂政子 原田洋子 角谷勇二郎 三上智志 山本郁夫 黒滝実 西浦広徳 西崎行雄 山下節子 木村ふで 菅野くみ子 菅野重一 森嶋ふき子 飯田勝勉 飯田勉 藤田八重子 藤田周次郎 吉田友衛 兼平幸四郎 小野ちえ子 八木えき子 八木一子 多田せり子 岩崎留吉
- 上平京子 小沢悦子 尾藤祥子 山本清造 鴨田嘉明 吉田嘉明 福澤久夫 松尾理沙 七戸武彦 岡村美穂子 小高政子 大高友蔵 黒滝進 菅雅美 奈良岡紘子 山下文子 花谷俊昭 黒滝茂則 石崎高志 塚本方子 猪俣清美 有馬邦彦 磯野弘 橋本きよ子 倉田信子 小島道子 齋藤久子 竹越三男 加藤史子
- 嶋崎幸子 福澤正行 大船哲三 片井進 小川茂二 長谷川兵次郎 高下房子 中村由紀子 戸沢静江 西村康雄 岩村たね 前田たね 岩谷薫 石沢秀敏 山本忠徳 福沢文男 角谷幸雄 石崎廣志 小野秋夫 富沢信一 倉田良子 羽立隆 宮本実 横山りつ子 八木橋潤一 佐藤完示 岸本真紀子 大平素子 野坂栄子 北村充子
- 山田明 田中利通 山下光男 上田宏 住吉勝 前嶋富美子 野呂萬作 関根繁子 五関美香子 上田豊年 西崎修治 吉田文雄 菅本美代子 山下昇 派官宣隆 永富まゆみ 山本剛士 久慈諭吉 大沢ミツ 大谷篤 赤平信雄 福士照子 上田静子 鈴木みわ 加藤清衛 工藤昭夫 竹内和子 七戸武彦 菅原弘

◆ 連載 ◆

深浦の歴史 ⑧

深浦町文化財審議委員 森山嘉蔵

今甦える中世戦国の深浦 II

7. 戦国末期の深浦を取り巻く情勢

これ迄と少しばかり趣向を変えて、主として織田・豊臣政権時代の、深浦を取り囲んでいる情勢を調べてみる。

①大浦為信発展期の北奥羽の諸豪
深浦と直接的な関わりを持つ大浦氏と松山安東氏。それらと遠交近攻の関係を有する有力な戦国大名としては、波岡城北畠頭村、大浦城南浦為信、三戸城南浦政政、八戸城南浦政栄(以上青森県)。長岡城浅利勝頼、松山城安東愛季、六郷城六郷道行、本堂城本堂道親、横手城小野寺輝道、仁賀保城仁賀保孝長(以上秋田県)。九戸城南浦政実、久慈城久慈直治、閉伊城千徳政義、黒沢尻城和賀義忠(以上岩手県)その他十大名ばかりに、最上義光、上杉謙信などは強い影響力をもつて存在していた。これらの有力戦国代表は、権謀術数、軍備や細作を放しては相手の動静を入手し、謀略的宣伝で扇動し、また政略婚姻を繰り返す。時には仇敵となつて合戦し、そして盟邦となつて親交しながら機を窺い、時機を得たら忽ち牙をむいてこれを倒しては領国を拡充していく戦国豪族である。

②大浦為信、津軽統一合戦の相手諸豪は
大浦城四代(初代弘前藩主)は、三戸南部氏から独立して、津軽統一を図るといふ野望を画し、津軽平原に蔓花菱紋の旗幟を、マンジの馬印を翻した。それは許さずと、弓矢を交わすは、南部宗家から派遣されている石川城南部高信、和徳城和徳謙政守、大光寺城代滝播磨その幕下の新屋城新屋源次郎、尾崎城尾崎喜蔵などの土豪連。外ヶ浜方面では油川城奥瀬善九郎、高田城土岐則基、蓬田城蓬田越前、横内城堤正左衛門等である。そして、奥羽の名門で、南部宗家や松山安東

③天文年間(一五三二〜一五五五)
鼻和郡西浜地区の村邑
戦国期の津軽地域は開発が遅れており、戸数人口は極めて少なかったようである。

天文十二年(一五四三)、浪岡北畠家が調査したと言われている。津軽最古の郷村帳「津軽郡中名字」という史料が残されている。この記録には西浜地域の十六ヶ村落が記入されている。

鯉ヶ沢・浮太刀(近代浮田)・猛房(近代湯舟)・赤石・立里・西船岡・下磯・風合瀬・トドロキ浜・追良瀬・飛浪途(近代広戸)・浪車・吹浦(近代深浦)・貞内・横浜・金河

④戦国期深浦への出入船
この時代の豪族は、領内の生産を高めて領民の暮しを豊かにし、諸税を納入させることで戦費を増大し、精兵を養い、強力な戦具を整備し、領国拡大合戦に勝利する。この為に生産物の交易、特に海上交易に重点を置いた。合戦によって数多い亡命者も北国に流れた。蝦夷ヶ島の和人が急激に増えたという。湊出入の船数も多くなった。

深浦では次のような史例がある。円覚寺に、国重文「薬師堂厨子」の裏側に、「本能寺の変」のあった天正十年に、参詣に来た上方の人の記念書きが残っている。さらに、慶長三年八月、越前三国湊の半兵衛が「鎮子」を奉納している。(次号は「深浦の城館」)

氏とも縁故のある波岡城北畠頭村の座下にその下に入っている原子城原高氏、飯詰高